

三つの政治文化

—— ボランティアを進める政治・社会的文化 ——

神 江 伸 介

はじめに

第一章 三つの地域社会における社会経済的地位の違い

第二章 三つの地域社会における政治態度の違い

第一節 政治参加

第二節 保守－革新

第三節 一貫票

第四節 候補者に対する見方

第三章 地域社会等に対する信頼

第一節 信 頼

第二節 満 足

第三節 国政信頼

第四章 ボランティアと政治

第一節 高齢者ボランティア

第二節 ボランティア一般

第三節 ボランティアと政治

おわりに

はじめに

香川県東部ををほぼ南北に縦断する細長い形で位置する三木町は、いくつかの村が合併したコミュニティである。基本的に、高松市郊外地区として発展している地域、かなり郊外から離れているが琴電沿線の地域、そして南に広がる農村地域に分かれる。三木町は、西地区から東地区、そして南地区へと移動するにしたがって、高松市郊外の最も都市化された地域から東部のやや都市部から遠い地域、そして過疎化しつつある南部域に分けられる。西地区には香川大学の農学部、医学部（附属病院も）が存在し、東地区には旧型、新型特養の二つが存在する。2005年の調査をまとめるに当たりこの三つの地域を原則として、現大字地域＝旧村をまとめることによりデータベースを作り、2005年度に実施した町民調査⁽¹⁾の分析をする。人口動態と産業上の実態⁽²⁾としては下に見るような状態である。

図表1 三木町人口各地区の増減

三木町人口の増減							
年次	西地区	南地区 K地区	南地区 T地区	南地区 H地区	東地区 S地区	東地区 I地区	総人口
1955	8,461	3,091	4,520	5,228	2,440	3,277	27,017
1960	8,124	2,804	4,239	4,954	2,287	3,007	25,415
1965	7,960	2,492	3,800	4,735	2,141	2,888	24,016
1970	8,280	2,175	3,537	4,606	2,006	2,704	23,308
1975	8,748	1,950	3,642	4,814	2,090	2,686	23,930
1980	9,011	1,851	3,717	5,050	2,408	2,952	24,989
1985	9,808	1,730	3,771	5,049	2,586	3,077	26,021
1990	10,277	1,608	3,748	5,452	2,781	3,100	26,966
1995	10,966	1,488	3,603	5,811	2,825	3,073	27,766
2000	11,389	1,283	3,482	6,552	3,133	2,930	28,769

- (1) 調査の詳細については、神江伸介、堤英敬「高齢社会有権者の社会参加と政治参加－香川県三木町2005年の場合」『香川法学』25(3・4)、神江伸介、堤英敬「地域社会におけるエイジング基本調査コードブック（制度領域調査）」香川法学25(3・4)を参照のこと。
- (2) 以下の記述は、三木町史編集委員会『三木町史 現代史編』「第九章 各地区の特徴と変貌」373-427頁と、香川県三木町の協力による。

西地区では、人口8,461人(1955年)から11,389人(2000年)と2,928人増えた。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は5.8%である。⁽³⁾

東地区の全体では、人口5,717人(1955年)から6,063人(2000年)と346人増えた。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は9.8%である。

東地区の構成地区のS地区では、人口2,440人(1955年)から3,133人(2000年)と693人増えた。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は8.7%である。I地区では、人口3,277人(1955年)から2,930人(2000年)と347人減った。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は10.8%である。

南地区の全体では、人口12,839人(1955年)から11,317人(2000年)と1,522人減った。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は13.4%である。

南地区では、構成地区のH地区では、人口5,228人(1955年)から6,552人(2000年)と1,294人増えた。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は9.1%である。

構成地区のK地区では、人口3,091人(1955年)から1,283人(2000年)と1,808人減少した。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は25.8%である。

構成地区のT地区では、人口4,520人(1955年)から3,482人(2000年)と1,038人減少した。2000年国政調査での15歳以上就業者中農林漁業就業者は17.2%である。

本論においては、政治態度、信頼、ボランティアの順に述べられるが、論述の基本的問題意識は、高齢社会におけるボランティアを促進する政治文化は何であるか、である。特に焦点を、非高齢者も高齢者も携わる、高

(3) 総務省統計局ホームページ <http://gisplaza.stat.go.jp/GISPlaza/index.html> より。

高齢者に対するボランティア＝高齢者ボランティアに当てている。

最近高齢社会と地域社会の崩壊あるいは存続という視角で高齢者と社会の関係を問題にし始めた社会学、政治学の研究が見られるようになってきた。例えば、「グローバル化の進展や少子・高齢化」に対して「条件不利」⁽⁴⁾な地域の研究を掲げてなされた熊本県葦北郡芦北町の研究や、離島という「居住条件不利地域」の長崎県五島列島が「住民の組織や類縁組織が地域戦略的手法」⁽⁵⁾によって福祉社会発展の先端地域になってゆく事例の研究などが挙げられるだろう。ここでは、条件不利な地域を含む地域社会の分析を、パットナムが強調している市民が自発的結社を作り「市民共同体の規範と価値は、独自の社会的構造・諸実践」⁽⁷⁾をしようとするボランティアに焦点を当てて、それを促す政治・社会的文化は何か、という極めて特定のな問題に限定して行っている。

データを一覽したところ、三つの地域社会は以下のような特徴を持っている。

1. 現代の都市化された地域の特徴として、西地区は政治とボランティアにおいて非高齢層と高齢層との断絶がある。
2. 高齢者は断絶された中で、政治集会に参加しボランティアをするなどというやり方で高齢者自身の助け合いを行っている。
3. 農村的な地域の特徴として、南地区では非高齢層との断絶を明確な形では見せない。若い者も結構政治集会に参加し、地域社会全体としての助け合いが見られる。
4. 都一農の中間に東地区が位置する。この高齢者は社会的活動も余り

(4) 山中、上野真也編著『山間地域の崩壊と存続』（2005年）、I頁。特に、社会資本の概念を用いて研究をおこなっている上野真也の研究が注目される。

(5) 叶堂隆三著『五島列島の高齢者と地域社会の戦略』（ii頁、2005年）。

(6) 「条件不利」な地域は、人口減少をこうむっている南地区のK地区とT地区がそれにあたる。

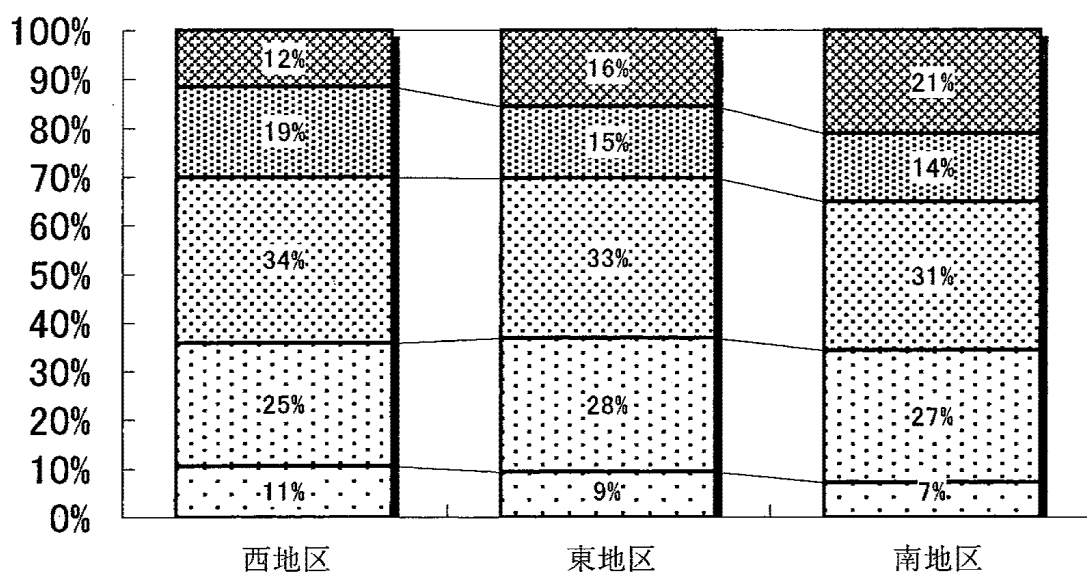
(7) ロバート・D. パットナム著、河田潤一訳、『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』（2001）、107頁。

やらないが、政治に対する関与も低い。

第一章 三つの地域社会における社会経済的地位の違い

図表2 町内における年齢別人口の割合—調査サンプル

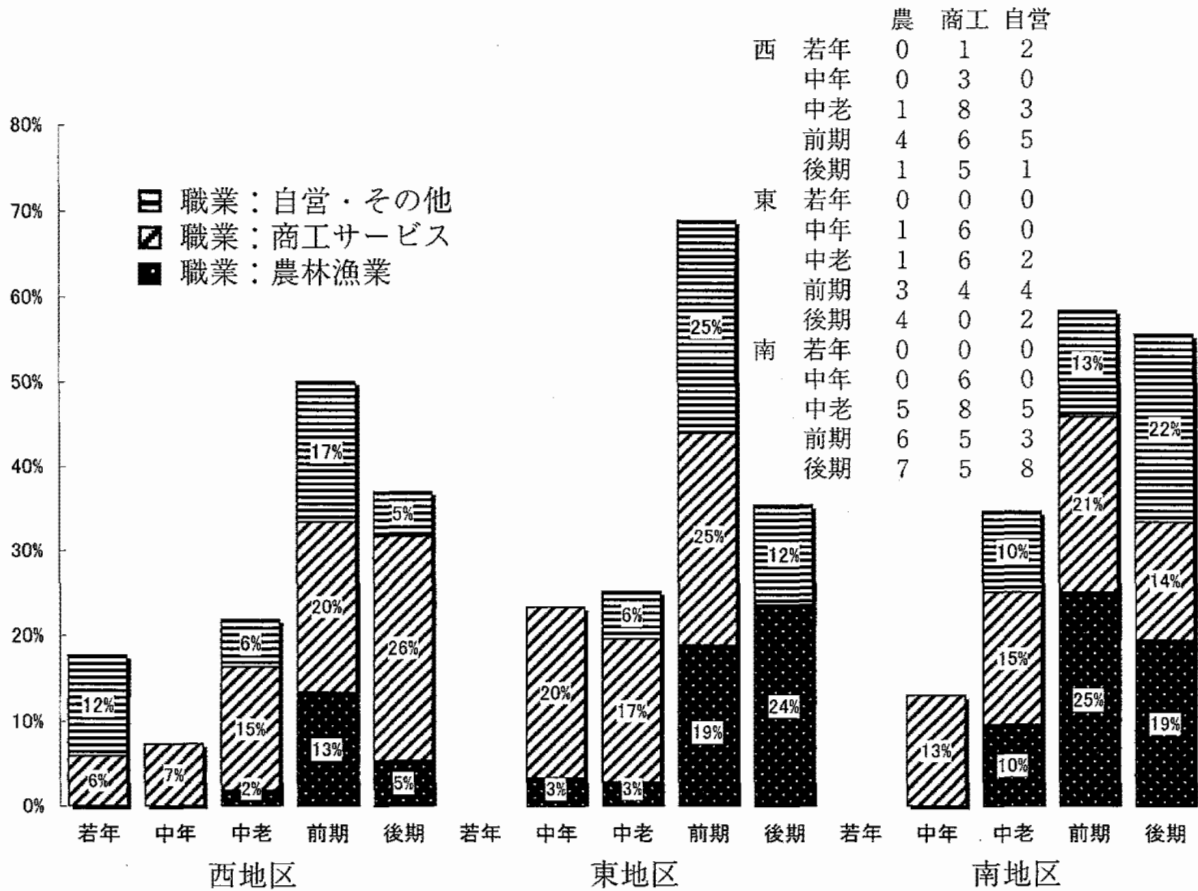
■ 後期	75歳—	西	東	南	
▣ 前期	65歳—	若年	17	10	12
▤ 中老	50歳—	中年	41	30	46
□ 中年	30歳—	中老	55	36	52
□ 若年	20歳	前期	30	16	24
		後期	19	17	36



2000年国勢調査で未成年人口も入れて高齢者人口をみると20.6%であり、20歳以上のサンプルで西地区が31%、東地区が31%、南地区が34%であった。高齢者の内訳では西地区と東地区では後期高齢者が前期と同等かより少ないのに対し、南地区では5%以上上回っている。あえて都市から農村の連続体でランクをつけると、西地区—東地区—南地区となるであろう。これはまた、地域の産業構造ともほぼ対応している。

農林漁業・商工サ・自営業その他の高齢者に限定して比率をサンプルで見ると、「図表3 各地区の自営業」によれば、農林漁業が西地区で前期高齢者が13%、後期が5%、東地区で前期が19%、後期が24%、南地区で前期が25%、後期が19%であった。東地区と南地区が農林漁業で近そ

図表3 各地区の自営業



うに見えるが、この項目は多数回答で取ってあるため、更に東地区に商工サと、自営・その他で比べると前期高齢期に圧倒的にこの多くのカテゴリーが集まっている。

社会経済的地位のその他の特徴を図表4で見てください。

「図表4 各地区の社会経済的地位」によると、教育程度でいずれの地区も前期高齢期ではあまり変化はないが、後期高齢期になると東地区のみ大学以上がゼロであり中学のみの卒業というものが81%と極端に多い。

世帯構成は、単身または夫婦のみという世帯が、西地区では前期・後期高齢期が52%、53%、東地区では44%、54%、南地区では、63%、31%となっている。すなわち、都市的郊外型の西地区と東地区では独立居住の傾向が強かつ後期高齢期までその傾向を持続させる。更に、後期になると「子と同居するもの」=いわゆる晩年型同居が1.4~3倍となる。農村

図表4 各地区の社会経済的地位

教育程度	西地区			東地区			南地区		
	中学	高校	大学・短大・高専	中学	高校	大学・短大・高専	中学	高校	大学・短大・高専
	前期	10 33%	17 57%	3 10%	6 40%	9 60%	0 0%	10 42%	13 54%
後期	9 47%	6 32%	4 21%	13 81%	3 19%	0 0%	21 62%	6 18%	7 21%

世帯構成	西地区					東地区					南地区				
	単身	夫婦	親と同居	子と同居	その他	単身	夫婦	親と同居	子と同居	その他	単身	夫婦	親と同居	子と同居	その他
	前期	2 7%	13 45%	5 17%	2 7%	7 24%	0 0%	7 44%	2 13%	4 25%	3 19%	3 13%	12 50%	3 13%	6 25%
後期	2 11%	8 42%	3 16%	4 21%	2 11%	5 29%	4 24%	2 12%	6 35%	0 0%	2 6%	9 25%	6 17%	14 39%	5 14%

	本人の健康状態等			就業状態			家計状況		
	西地区 健康等	東地区 健康等	南地区 健康等	西地区 就業	東地区 就業	南地区 就業	西地区 心配なし	東地区 心配なし	南地区 心配なし
	前期	23 77%	13 81%	18 75%	10 33%	3 20%	7 30%	16 55%	9 60%
後期	16 84%	13 81%	25 71%	3 17%	0 0%	3 10%	14 74%	15 94%	27 79%

型の南地区では、前期高齢期は比較的（63％）に独立居住で後期には圧倒的に子と同居の傾向（「子と同居」39％）を示す。

健康状態は、南地区が「健康等」が7割に近くなり若干の不安を見せる。

就業状態では、前期に3割の就業率を見せるが後期には大体の人が引退・退職をする。東地区で前期が2割、後期がゼロという就業率には注目しておいていいだろう。

「家計状況」では、西地区で「心配なし」とするものが低めで、東地区では94％もの後期高齢期のものが「心配なし」としている。

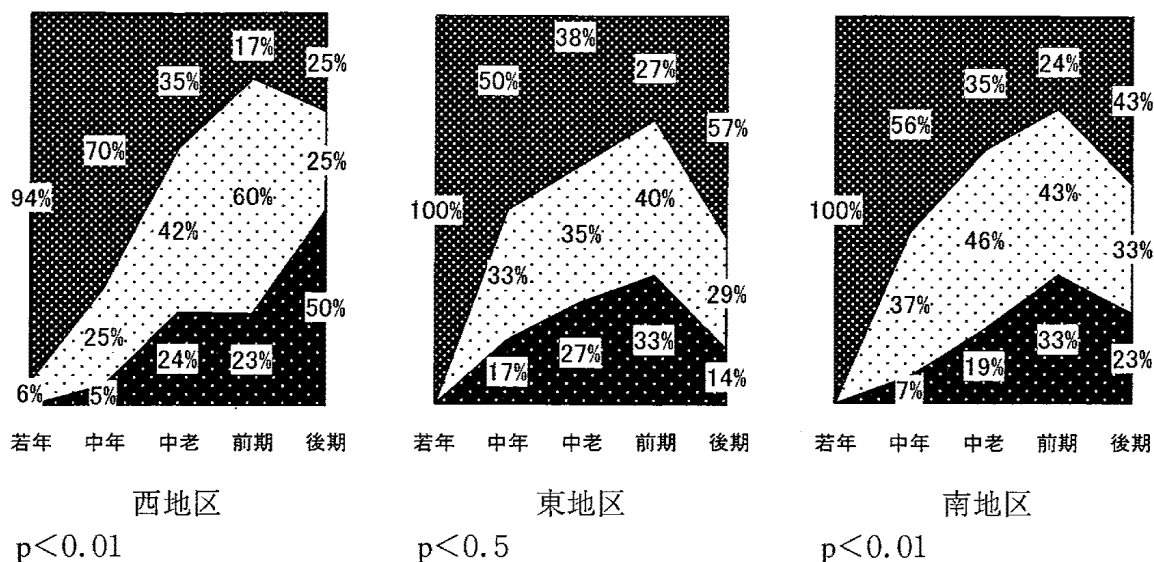
第二章 三つの地域社会における政治態度の違い

第一節 政治参加

図表5 団体集会の三つの地域社会間差

	西地区	東地区	南地区
実数	若年17 中年40 中老55 前期30 後期16	若年10 中年30 中老34 前期15 後期14	若年12 中年43 中老52 前期21 後期30

- 団体の集会—出席しない
- 団体の集会—ときどき出席
- 団体の集会—よく出席



団体集会参加も政治集会参加も社会参加と政治参加の違いはあるとはいえ参加行動を扱っているという点では同じである。つまり、参加に対する態度ではなく、参加の事実を聞いているのである。

この行動事実は、次の「ボランティアに対して関心」(最終的な従属変数)につながる。

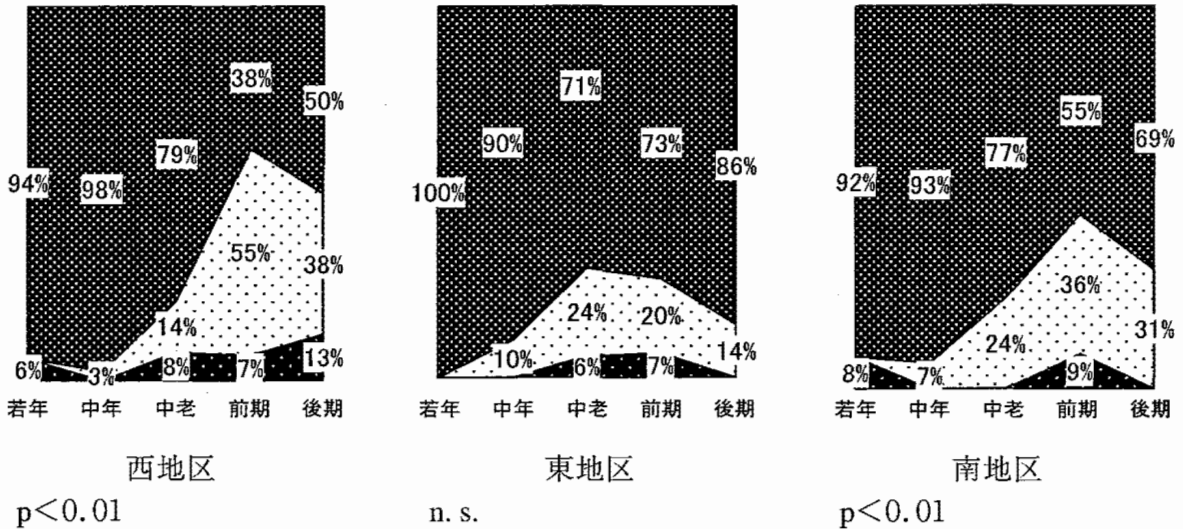
私のニューシニアは年齢から見て既に後期高齢期に入っている⁽⁸⁾ので、高齢期以降をすべてニューシニアとして扱える⁽⁹⁾。町全体として全般的に以下

(8) 拙著『政治老年学序説』を参照のこと。

図表6 政治集会の三つの地域社会間差

■ 政治集会—出席しない
 □ 政治集会—ときどき出席
 ■ 政治集会—よく出席

実数	西地区	東地区	南地区
若年	17	10	10
中年	40	30	30
中老	52	34	34
前期	29	15	15
後期	16	14	14



のことがいえる。

第一に、中年以下の若い層が演説会・国会報告会というような情報接触方式を取らなくなっていることである。ここには世代効果を考えることが出来る。

第二に、参加が20%を超えるのが中老以上になってからで、それから前期高齢期になるとほぼ50%になる。ここには、ライフサイクルを措定できる。

第三に、それゆえ世代とライフサイクルは統一して把握するべきである。

地区別には、社会参加が先行し続いて政治参加が来るという形になるので、団体集会を見、次に政治集会を見ていこう。

(9) 敗戦時に24歳までであった人という世代で固定すれば殆ど全員がニューシニアである。この世代論とのからみで以前の定義の拡大と1971年からの明るい選挙協会での世論の展開のフォローを現在準備している。

「**図表5 団体集会の三つの地域社会間差**」によると、西地区の団体参加の特徴は、若一中年まで参加が上がらず、中老になると30%から66%に跳ね上がるという特徴を持っている。しかも比較的「よく出席」するものがいてそれは増え続けて後期高齢期には半数に達するといういわば民主的な側面を持っている。更に、前期高齢期には8割を超えそれは後期高齢期まで殆ど維持されるという活況を呈する。

比較のし易さから、次に南地区を見てみよう。西地区と対照的に、既に44%という中年レベルから盛んな参加があって西地区と同じ65%という参加へと連続する。ところが、高齢期になると後期高齢期で参加度が維持できない(56%)という違いが出てくる。更に、前期高齢期に「よく出席」するものが集中し中老以下が「よく出席」に参加度が低いという特徴がある。

東地区の場合、中年では若干低いものの50%という参加があり、それは前期高齢期まで同じだが後期高齢期になると急に落ち込むという特徴がある。

団体集会参加傾向が政治集会参加（「**図表6 政治集会の三つの地域社会間差**」）になると極端な形で現れてくる。

西地区は南地区も中年までは政治集会参加は10%をきるという低さで、中老になると22%、前期高齢期62%、後期高齢期は12ポイント程度減るものの、まだ「よく出席する」ものは逆に増えている。南地区は、中年まで10%のレベルを維持し、その後は後期高齢期での落ち方が西地区より強い。東地区では、非高齢層は南地区とほぼ同じとしても高齢期になると他地区で見られた盛り上がりは全く見られなくなる。

一言でまとめると、50歳以上で活発な西地区、高齢者で不活発になる東地区、大体全ての年齢層で活発な南地区ということになるであろう。

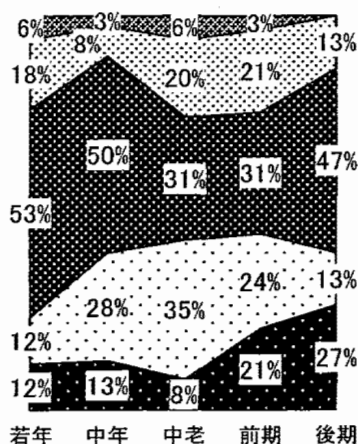
第二節 保守一革新

通常党派性で全面的に議論するのだが、町との話し合いで政党支持等が

図表7 保守－革新

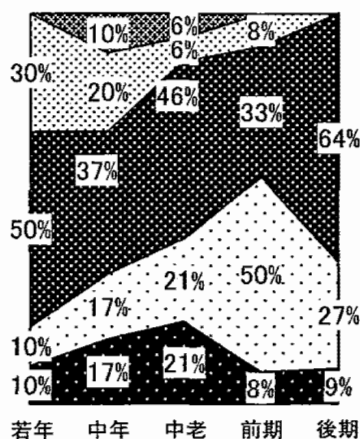
- 保守－革新 革新的
- ▨ 保守－革新 やや革新的
- 保守－革新 中間
- 保守－革新 やや保守的
- 保守－革新 保守的

実数	西地区	東地区	南地区
若年	17	10	11
中年	40	30	39
中老	51	33	46
前期	29	12	21
後期	15	11	27



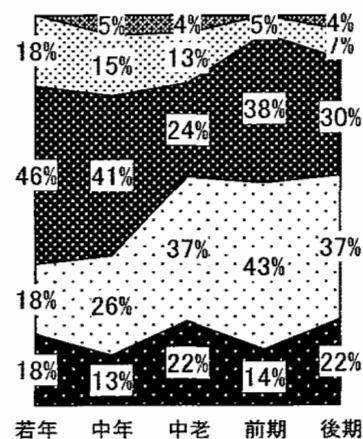
西地区

n. s.



東地区

n. s.



南地区

n. s.

入れられなかったもので、やむを得ず保－革単発で議論をする。

この変数の一般的性格としては、外的対象を持たず内面的な態度が主となる。その動きの特色としては、日本人の特色として加齢＝保守化であり、それで主たる供給源となるのが「中間」派である。そして後期高齢期になると「中間」派が増える形で政治的に不活発化してゆく。

「図表7 保守－革新」によれば、ここでは東地区がその典型の形を示す。前期まで順調に保守化（「保守+「やや保守」）は20%から58%まで増えてゆく。後期高齢期に入ると保守化は逆行し36%まで落ち、変わりに「中間」派が実に64%にのびる。

ところが、これに対して西地区と南地区が程度の差があるがそれを示していない。西地区では43%の中老時に保守化は止まり後期高齢期になっても40%と一定である。南地区では、59%にはなるけれどもそのままの値で後期高齢期まで行く。

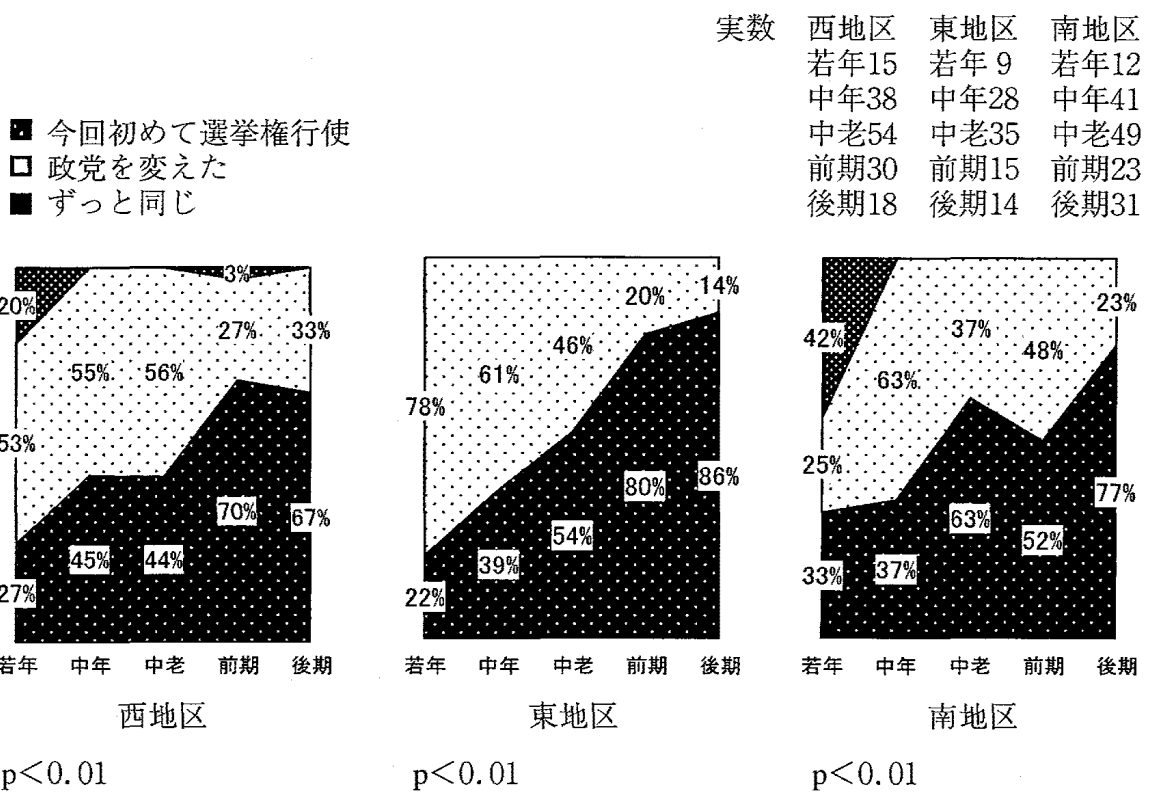
動きの内訳は、都市部と農村部の違いを見せる。西地区では、中老の8%から後期の27%まで「保守的」という保守の強化が進むし、同じ年齢層に革新的な階層が25%入り込み、結果「中間」が割り込みにくそうにしている。対照的に、南地区では保守の内訳は中年で完成するとともに「革新」系の後退も顕著である。

第三節 一貫票

この変数は、10年間に同じ政党の候補者に投票したかという問題であり、加齢とともに繰り返されるという意味で、加齢＝一貫票化を含んでいる。また、加齢＝一貫票化が、加齢＝頑迷化を持っており、加齢に一層の一貫票化を付加する。その意味で一生のライフサイクルに選挙における一貫票化を生むとっていい。

また、政党により提供された候補者の選択であり、内発的な保一革意識

図表8 一貫票



より環境の変動に動かされる、つまりグラフで言えば上下が激しい動きになってくるであろう。

それを統一して表現すれば、傾向として右肩上がりで上下の動きが加味されたグラフということになり、「**図表 8 一貫票**」でいえば、西地区や南地区にあらわされる。

それに対して、東地区の絵に描いたような右肩上がりの動きは、頑迷化と環境の変動に無関心な動きを示している。

ところで、東地区と南地区の後期高齢者は超高齢期の右肩上がりを示している。西地区の後期高齢者は前期高齢者と同じという意味で既に超高齢期がなくなっていることを示している。

第四節 候補者に対する見方

提供される 2005 年の総選挙の候補者を投票者が「地元か国か」の基準で選ぶという内発的な動機を調べる項目では、既に大部分の有権者の中で「国」中心の基準が根付いているのであまり違いは現れない。

「**図表 9 地元一国**」によると、年齢による有意差はないが、「地元」組が都市部の西地区に少なく、農村部の南地区に多いというのが観察されるであろう。

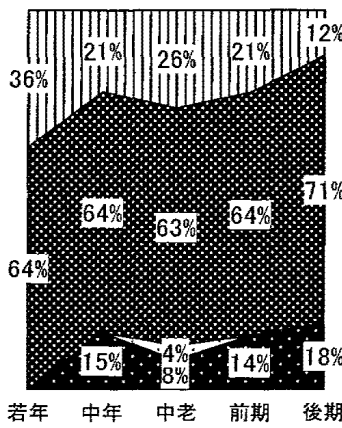
しかし、この変数でも後期高齢者の段階で、「どちらでもない」とする超高齢期判断停止組が東地区にはかなりの部分いることが観察される。当時の選挙運動自体が郵政民営化をめぐる「国」全体に訴えていたことを想起したい。

選挙に際し候補者を候補者個人か、政党を重視して選ぶのか、の変数も投票者の内発的なものである。この変数も「党」がいかなる年齢層でも優位になってきているということを反映し、有意差はなくなっているが、若干の言及すべき特徴をまだ持っている。前の変数と大雑把に対応させていうと、地元を選ぶものが人を選び、国を選ぶものが政党を選ぶといえるだろう。

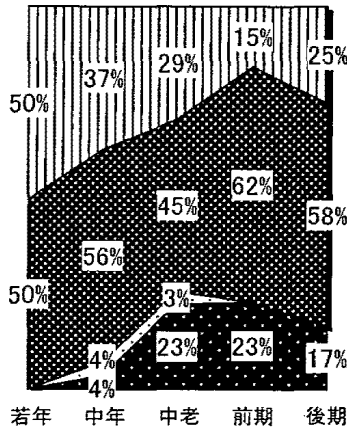
図表9 地元一國

- ▨ どれとは言えない
- ▩ 国政全体
- 職業利益
- 地元利益

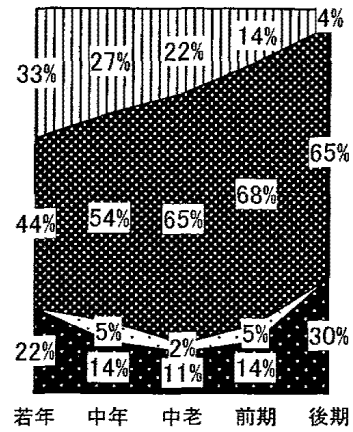
実数	西地区	東地区	南地区
若年	14	6	9
中年	33	27	37
中老	51	31	46
前期	28	13	22
後期	17	12	23



n. s.



n. s.

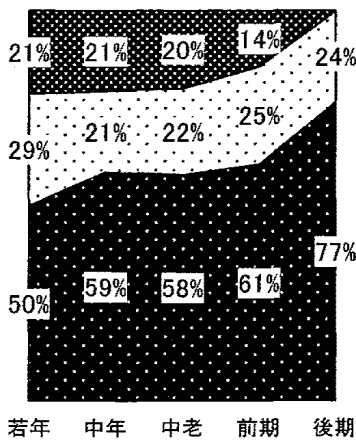


n. s.

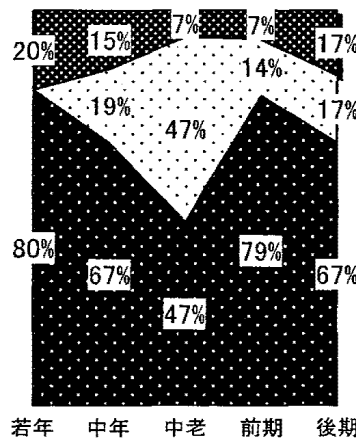
図表10 党一人

- ▨ 一概に言えない
- 候補者個人重視
- 政党重視

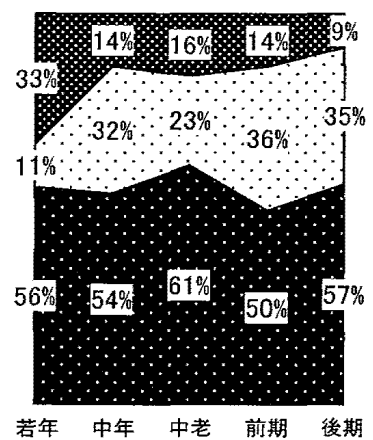
実数	西地区	東地区	南地区
若年	14	5	9
中年	34	27	37
中老	50	30	44
前期	28	14	22
後期	17	12	23



n. s.



n. s.



n. s.

「**図表 10 党一人**」によると、西地区では、50%で始まり後期高齢者で77%で終わるという「党」重視の傾向があり、それは「一概に言えない」を喰っている。南地区では、この高齢者の伸びが見られず、「人」重視の傾向を強める。都一農の違いを反映した動きである。

また、この変数でも後期高齢者の段階で、「どちらでもない」とする判断停止組が東地区にはかなりの部分いることが観察される。とともに、中老で47%もの「人」重視派が存在する。上の「地元」派が若干多いことと合わせて、地域の自営業者の意向を反映しているのかもしれない。

第三章 地域社会等に対する信頼

第一節 信 頼

ここでの変数は高齢者にのみ聞いたものである。会社や家庭のみの生活から退職・引退して地域社会へ出ての付き合い方、地域の目標まで共有して協力する（**図表 11**）、更に積極的にボランティアなどの社会活動をする（**図表 12**）、地域の人との積極的な付き合いをやる（**図表 13**）、もっと一般的に愛他精神を問う（**図表 14**）ものに分かれる。

これらのうち、あまり互いの相違が出ていないものは省き、都一農の違いが出ているもの、東地区の他地区との違いを浮き立たせるようなものに限って図示した。

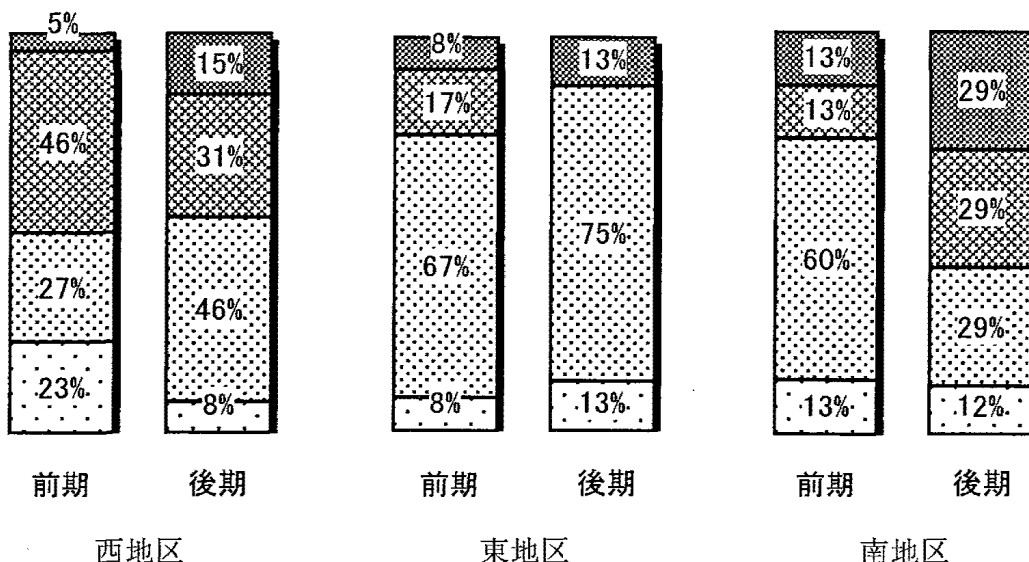
第一に、「**図表 11 集団に溶け込む**」では、個を殺して集団に従うという日本人の集団主義をよく引き出せていると思われる。都市部の西地区と異なり、前期高齢期で東地区と農村の南地区は集団主義賛成者7割を超えている。しかし、南地区では後期高齢期で西地区に近いか逆に高い現象が見られる。これは高齢化社会の一般的な現象であるので、むしろ東地区の88%を異常とみなさなければならない。

第二に、「**図表 12 ボランティアなどとの関わり**」では、前期高齢期では西地区と南地区がほぼ同じ形でボランティアが半分以上である。しかし、それも南地区では長続きせず、賛成派が3割である。問題は、前期高

図表11 地域との付き合い方（高齢者）「集団に溶け込む」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- ▩ 大体あてはまる
- よくあてはまる

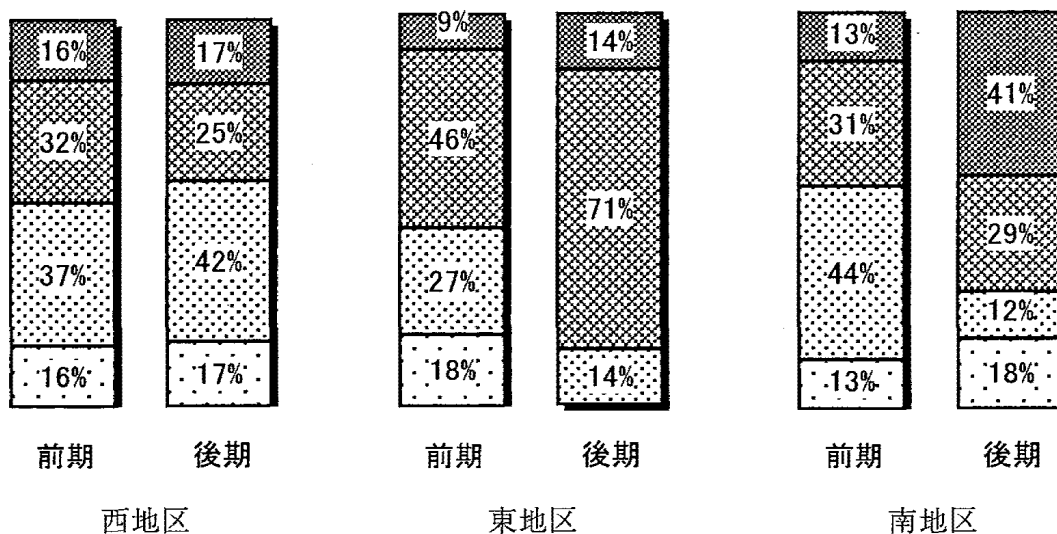
実数 西地区 前期22 後期13
 東地区 前期12 後期 8
 南地区 前期15 後期17



図表12 地域との付き合い方（高齢者）「ボランティアなどとの関わり」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- ▩ 大体あてはまる
- よくあてはまる

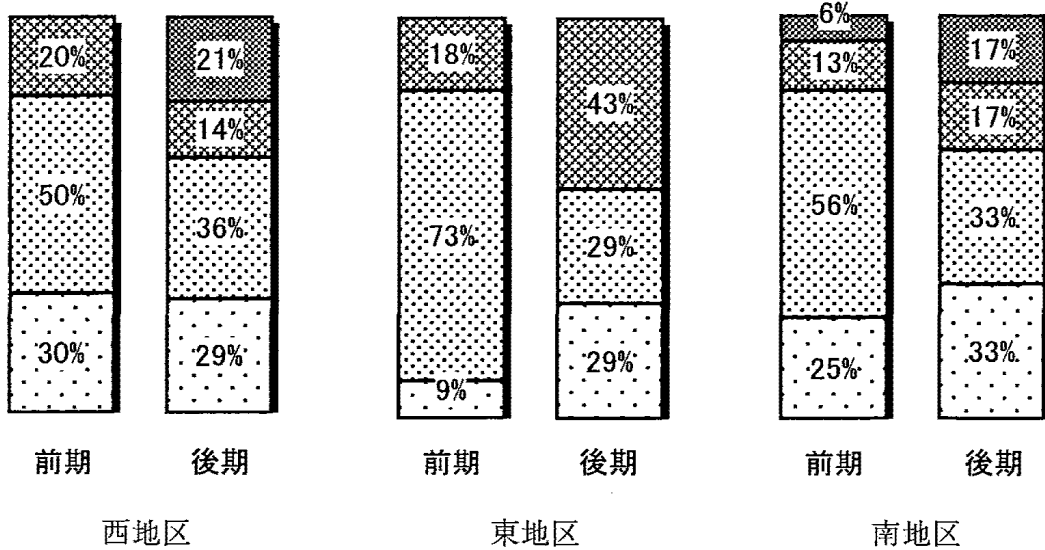
実数 西地区 前期19 後期12
 東地区 前期11 後期 7
 南地区 前期18 後期17



図表13 地域との付き合い方（高齢者）「地域の人との交際」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- ▤ 大体あてはまる
- よくあてはまる

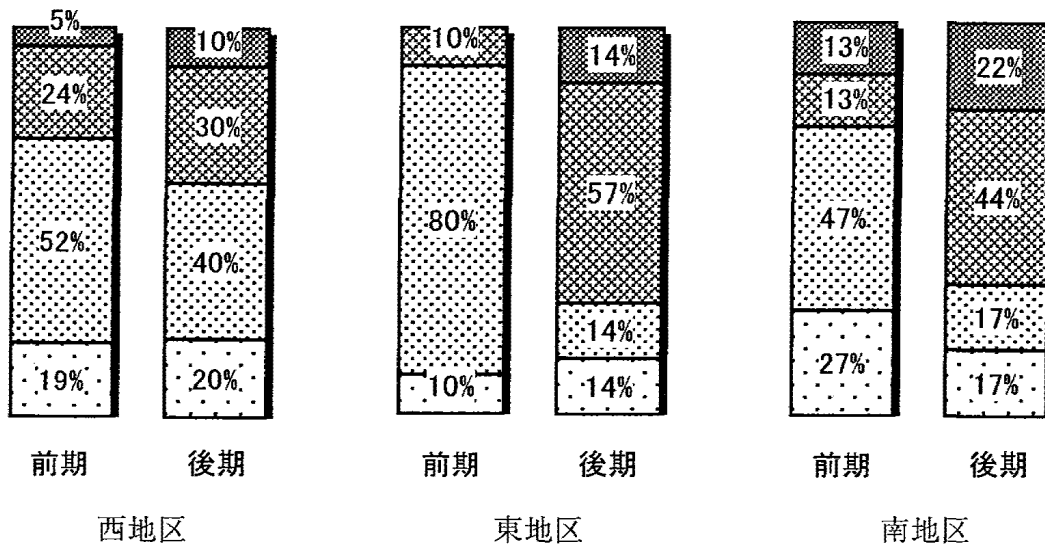
実数 西地区 前期20
後期14
東地区 前期11
後期 7
南地区 前期18
後期18



図表14 地域との付き合い方（高齢者）「人のために奉仕」

- まったくあてはまらない
- ▨ あまりあてはまらない
- ▤ 大体あてはまる
- よくあてはまる

実数 西地区 前期21
後期10
東地区 前期10
後期 7
南地区 前期15
後期18



齡期 53%，後期高齢期がなんと 59%になるという西地区である。

「**図表 13 地域の人との交際**」も同様の傾向を示しており、西地区と南地区は最初は同様の傾向を示しているが、南地区は長つづきしない。東地区では今度は事情が異なり前期高齢期では積極的に地域の人と交際するがやはり長つづきしない。

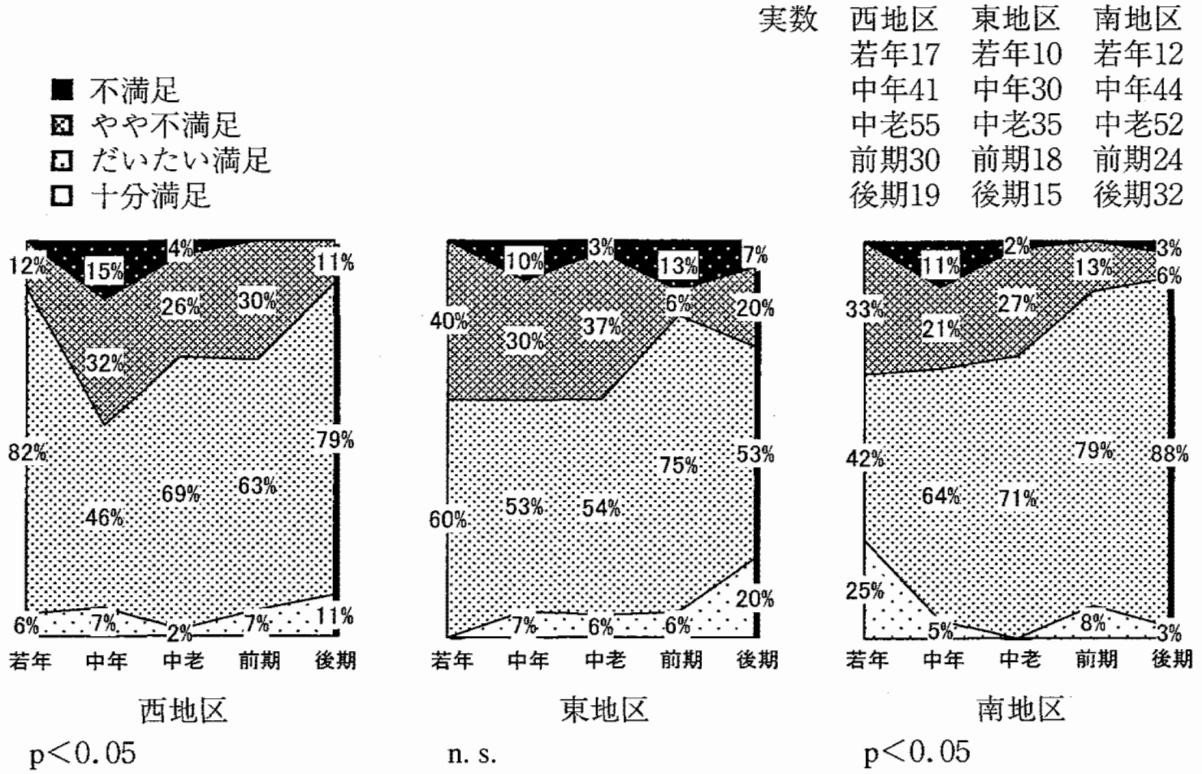
「**図表 14 人のために奉仕**」では、西地区と南地区が同じで、東地区も「地域の人と交際」を縮小しながらもそれは割と持続するようだ。

総じて、西地区の高齢者の人々は個人主義的でありながら活発にボランティア活動に打ち込み、かつ後期高齢期まで持続させるのである。他方、南地区の人々は集団主義の価値規範を持ちながらも西地区に劣らず活発にボランティアにかかわるが、残念ながら後期高齢期にはひどく衰える。東地区の人々は、南地区と同じく集団主義ではあるが、ボランティアのような特定の社会活動はまったくやらないし、後期高齢期になると完全にボランティア等が提供するものを受ける（「関心」は高いが）側に回ってしまうのである。

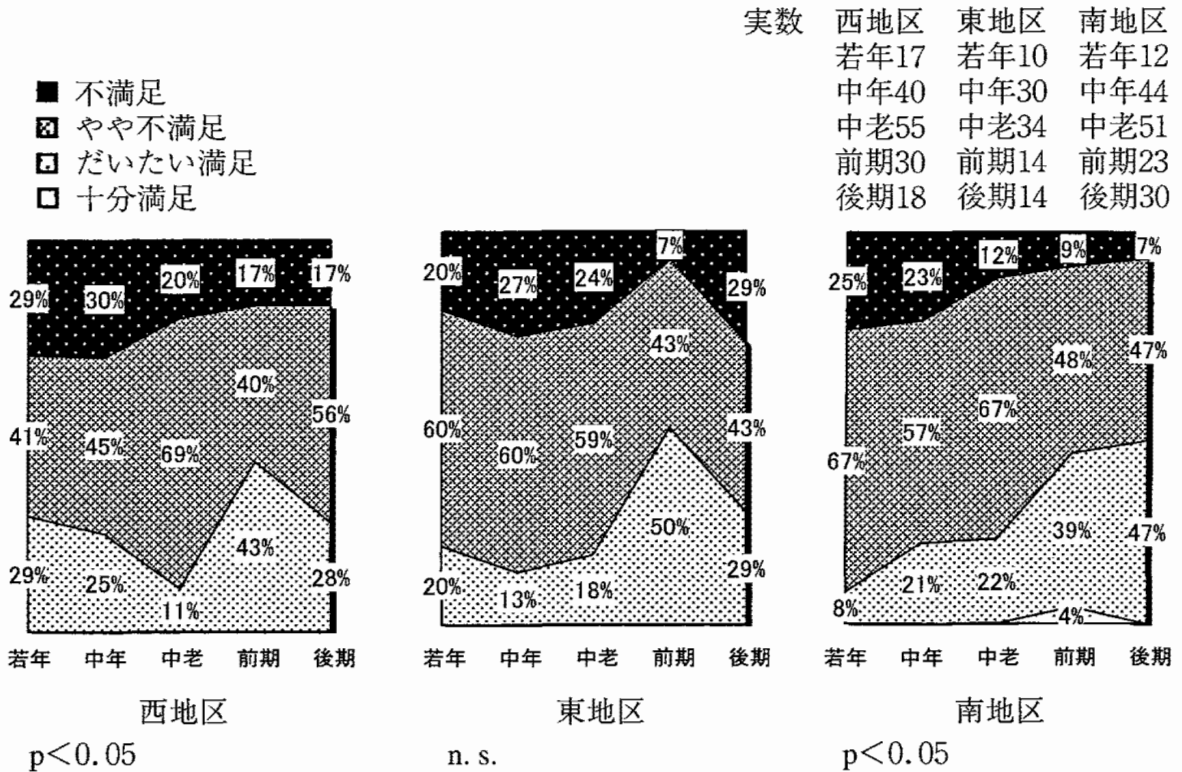
第二節 満 足

ライフサイクルからいえば、社会に出た直後は未成年期と連続して生活満足は高く、結婚や子育てや仕事に忙殺される中年では最も満足のレベルは低く、子供が手を離れ昇進も終わる中老には満足感が高く、そのまま高齢期に入るといふ、いってみれば「**図表 15 生活満足**」で西地区がその典型的なものである。そして、東地区と南地区がそれに続く。ただ東地区では高齢期での不満がかなり高いし、年齢が高くなるほど不満は3割に近くなる。これは、東地区において政治満足に連続し政治不満派が7割にも達するのである。後期高齢期が活発な西地区でも7割だが極端な不満派が17%と少ない。更に少ないのが南地区である。

図表15 生活満足



図表16 政治満足



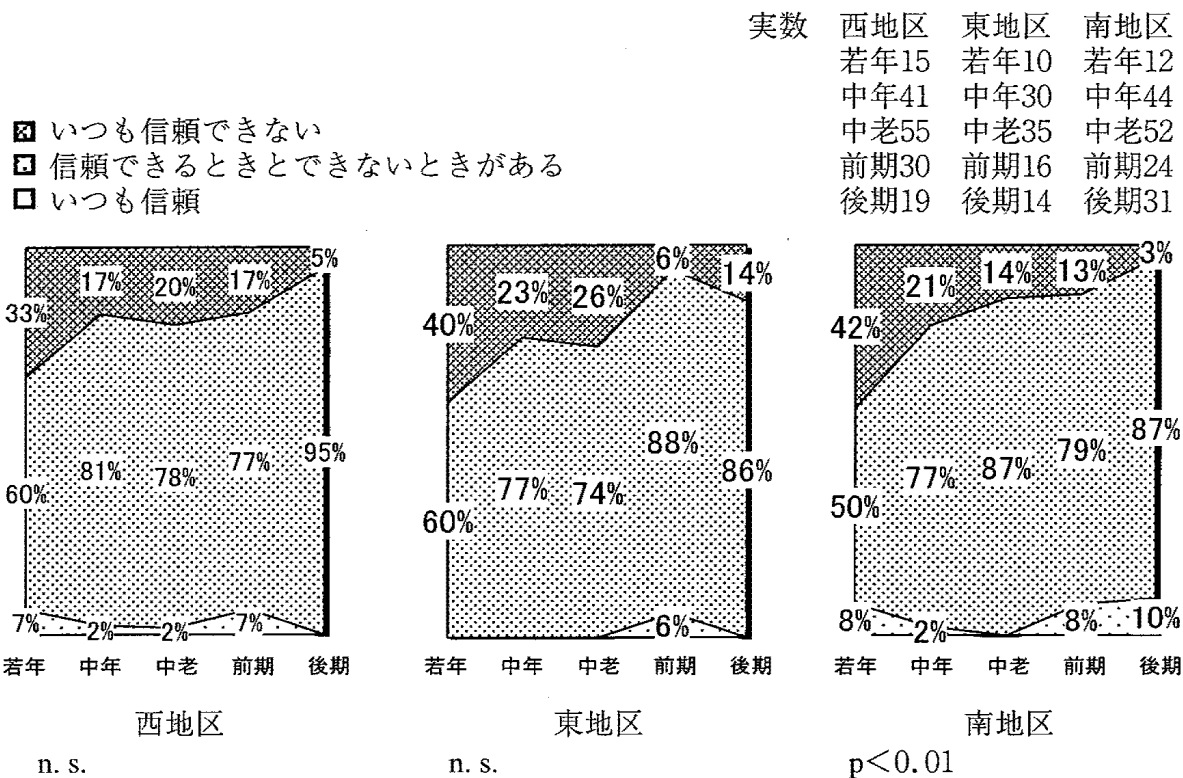
第三節 国政信頼

一般的傾向は、国政よりも地方の政治への信頼が強いし、農村部になるほどこの傾向は強化される。程度における違いがある。「**図表 18 三木町政への信頼**」を見ると西地区では、高齢期に若干の「いつも信頼する」に回ってくるほかは中老以降国政・町政変わりが無い。東地区では、高齢期にほとんどいなかった状態から20%~30%へと満足派がはいてくる。

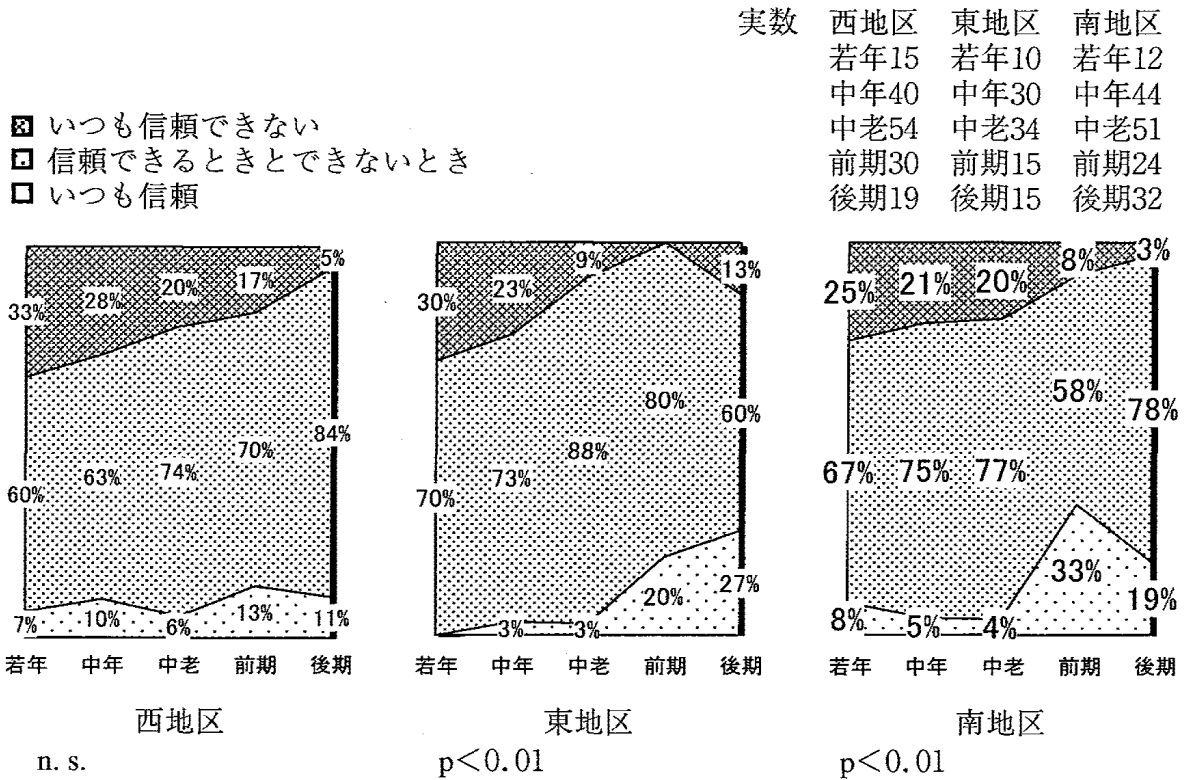
「いつも信頼できない」とする極端な政治不信は中老（9%）以降殆どない。南地区では、すでに前期で33%の信頼派がいるのに対し極端な不信派は10%を切っている。

この政治信頼の違いが、福祉の国政・町政レベルにおけるボランティアの違いに連続しているかどうかは興味がある問題であるがここでは分析しない。ただ、自治体に居住しているものが、その自治体に不信があるという態度を持ったままでボランティアを自主的にやっているとなるとかなり悲壮なイメージを抑えることが出来ない。

図表17 国政への信頼



図表18 三木町政への信頼



第四章 ボランティアと政治

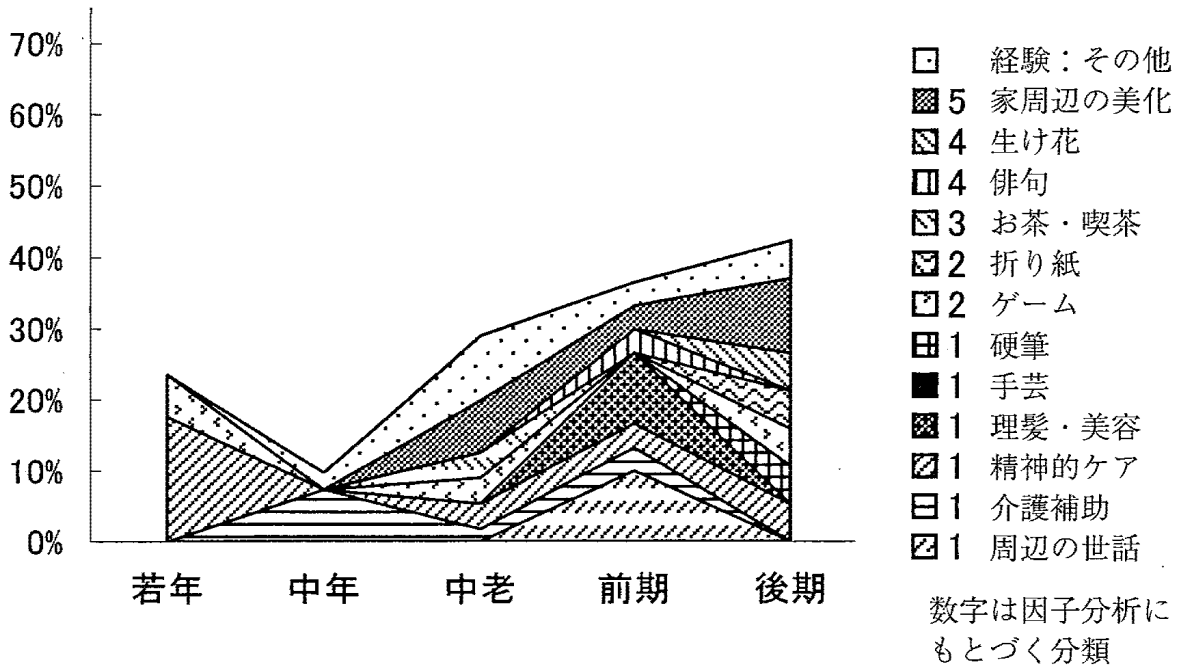
第一節 高齢者ボランティア

三つのグラフ（「図表 19-21 高齢者ボランティアの経験—西，東，南地区」）がいずれも異なる形をしている。第一に、全体の量で言えば明らかに南地区が一番多い。次に西地区、そして東地区という順番になるだろう。

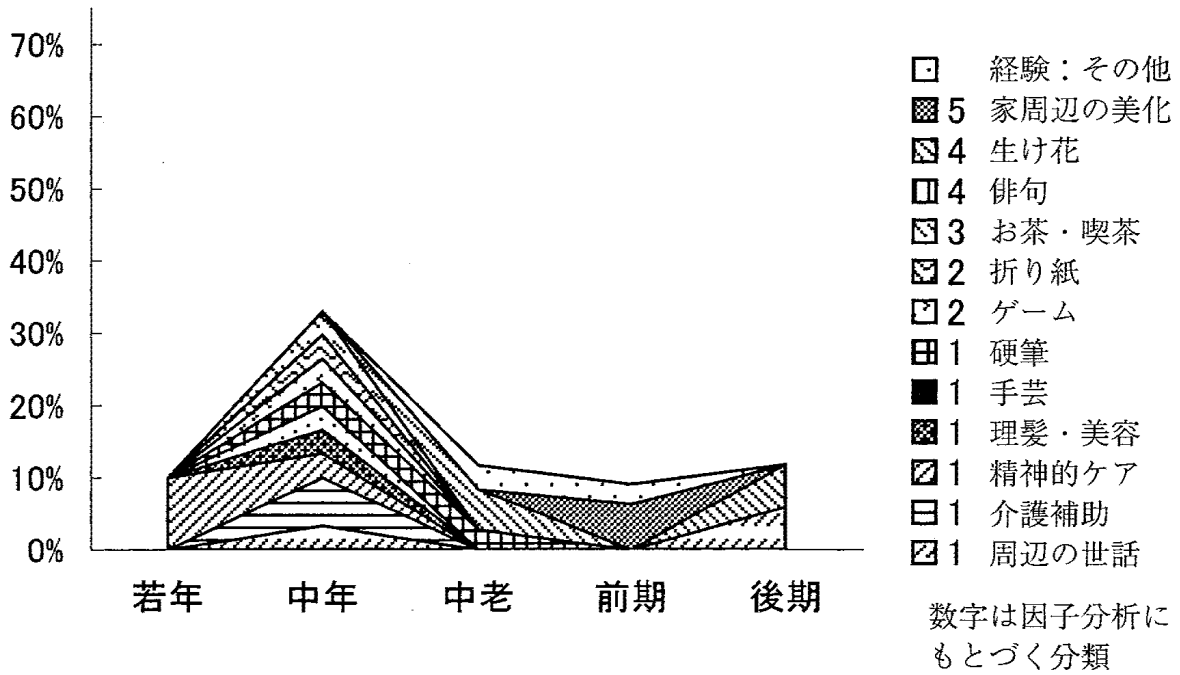
第二に、どの年齢層に偏っているかということでは、西地区は中老以上、東地区は中年、南地区は中年中老で低下するもののほぼ全年齢層にわたってボランティアが盛んである。更に、高齢者ボランティア種別という問題もあり、どの地区にどのようなボランティアが盛んであり、どのボランティアが不足しているか、どのようなボランティア器具が足りないのか、講師は必要か、などなど様々な問題があり、自治体への提言に有用であるが、今回のテーマとはずれるので割愛する。

一三〇

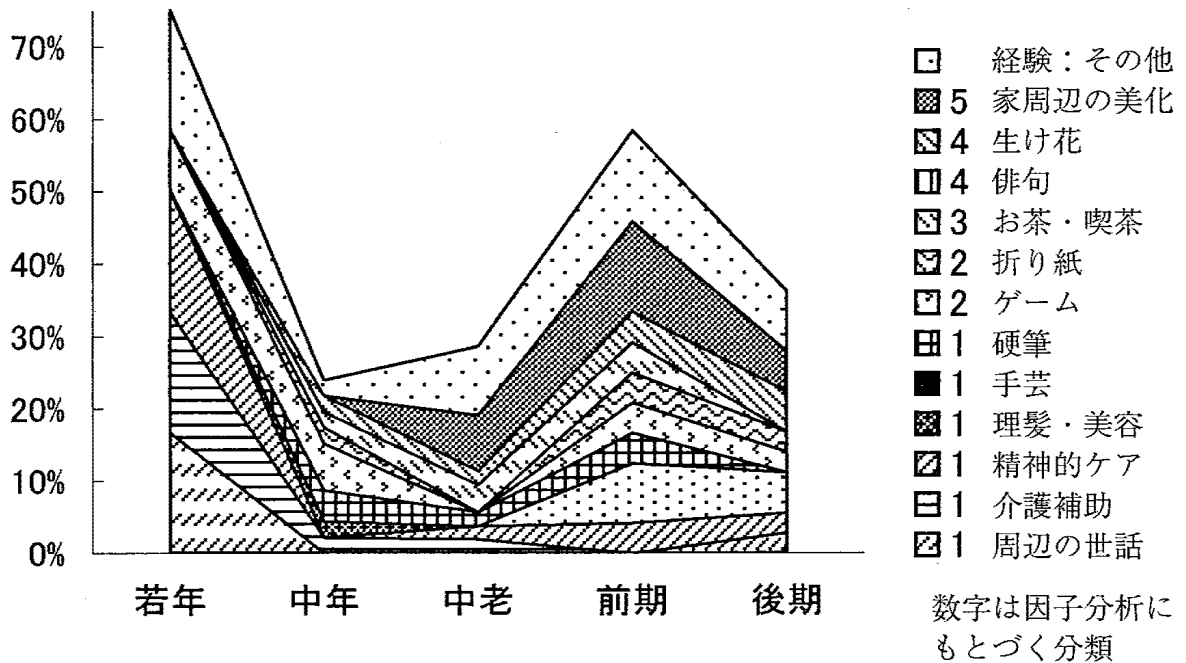
図表19 高齢者ボランティアの経験—西地区



図表20 高齢者ボランティアの経験—東地区



図表21 高齢者ボランティアの経験—南地区



高齢者ボランティア総量の違いからいって、何がいえるのか。

第一に、都市型高齢者ボランティアの自治的性格の強まりである。西地区だけではないが、調査には殆ど元気な高齢者が関与しており、地区では後期高齢期といえども前期におとらず関与している。自治的というゆえんは、非高齢者の関与が少ないことであろう。

第二に、農村型高齢者ボランティアの全コミュニティ関与的性格の強まりである。南地区に典型的に見られるのだが、中年中老は仕事・子育て等で多忙であるのは分かるが、むしろ20歳代の若いグループに関与が「すごい」面が見られる。逆に、後期高齢期になるとかなり衰える人もいて関与が衰退するが、それでも三つの地域社会の中では西地区と並ぶほどである。

第三に、中老以上殆ど関与がなくただ中年のみが細々と関与を継続させている東地区の存在は異常である。この地区に高齢者ボランティアの条件がないのか、二つの特養の存在により関与意欲を阻喪させられてしまったのか、これは今後の調査課題である。

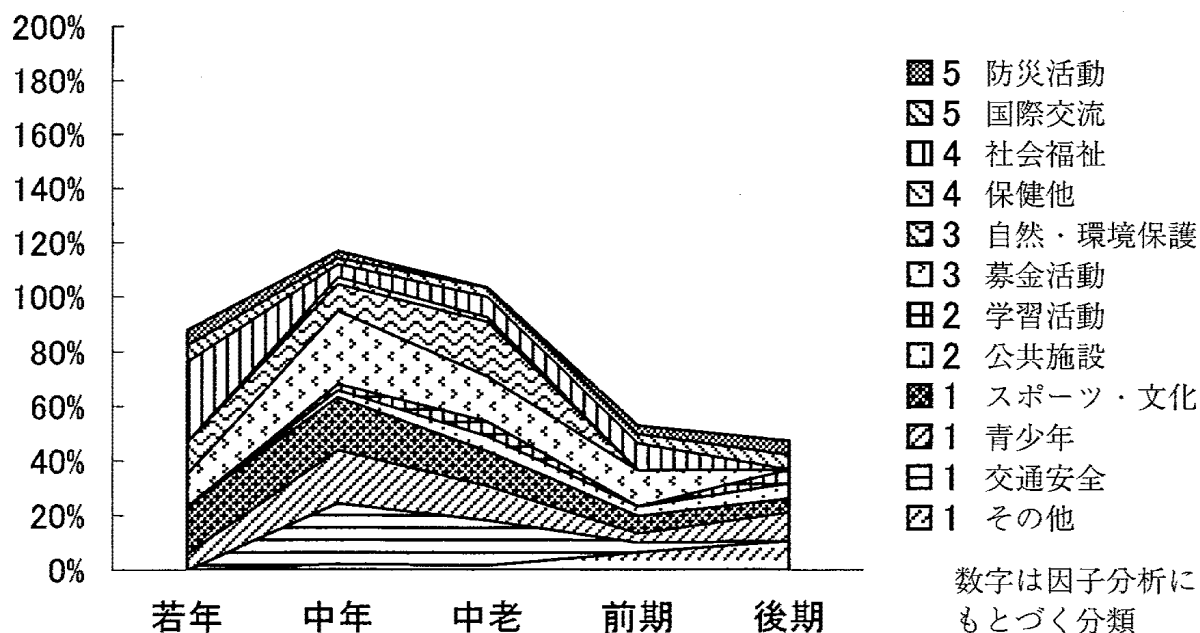
第二節 ボランティア一般

ボランティア一般は、「図表 22-24 ボランティアの経験—西，東，南地区」に見るように，西地区と南地区とも同じような山の形をしている。他方，東地区では高齢者ボランティアをいっそう歪にした形で，中年におよそコミュニティの中で最大の集中をしている。次のことが言えるだろう。

第一に，西地区と南地区は高齢者ボランティアと，ボランティア一般をかなりなところまで区別し，すみ分けているといえる。

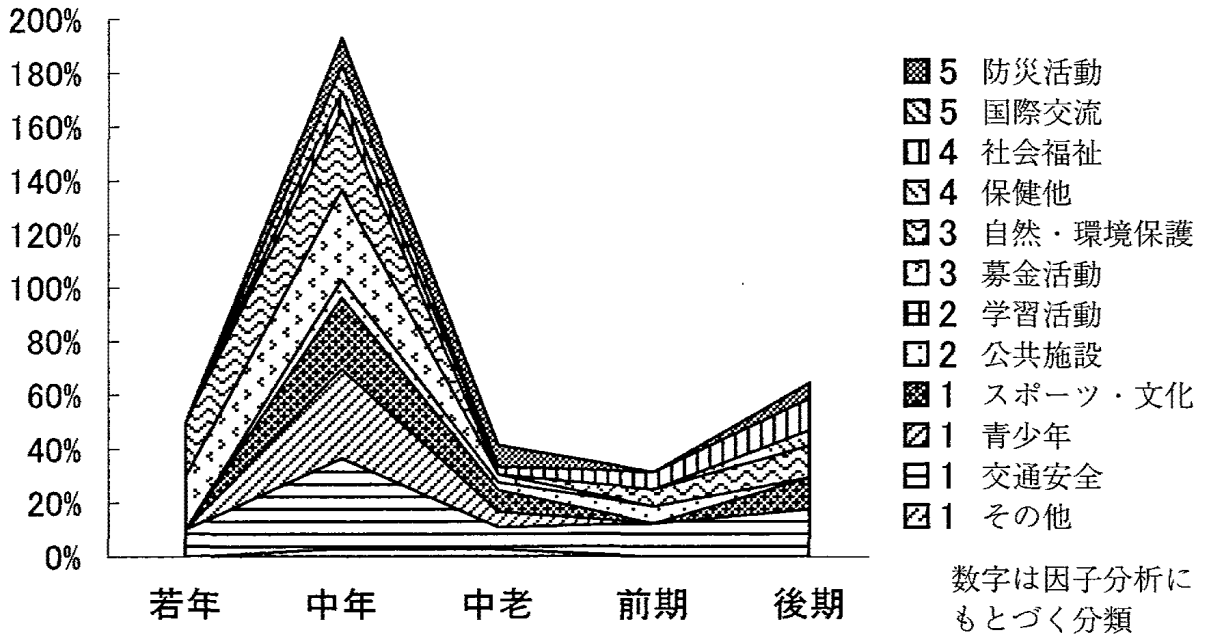
第二に，東地区は，沈滞している高齢者ボランティアを，ボランティア一般が繁茂することにより，いっそうの沈滞を生んでいるといえる。

図表22 ボランティアの経験—西地区

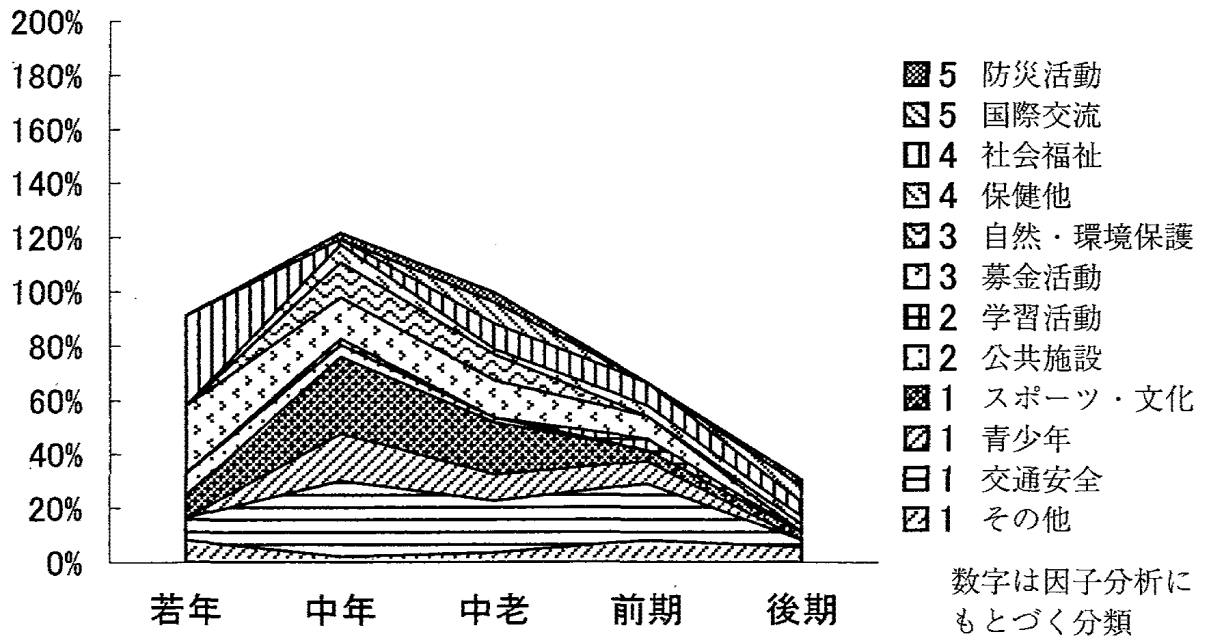


(10) 2005年には東地区に新型特養はまだ建っていない。2006年に開所。

図表23 ボランティアの経験—東地区



図表24 ボランティアの経験—南地区



第三節 ボランティアと政治

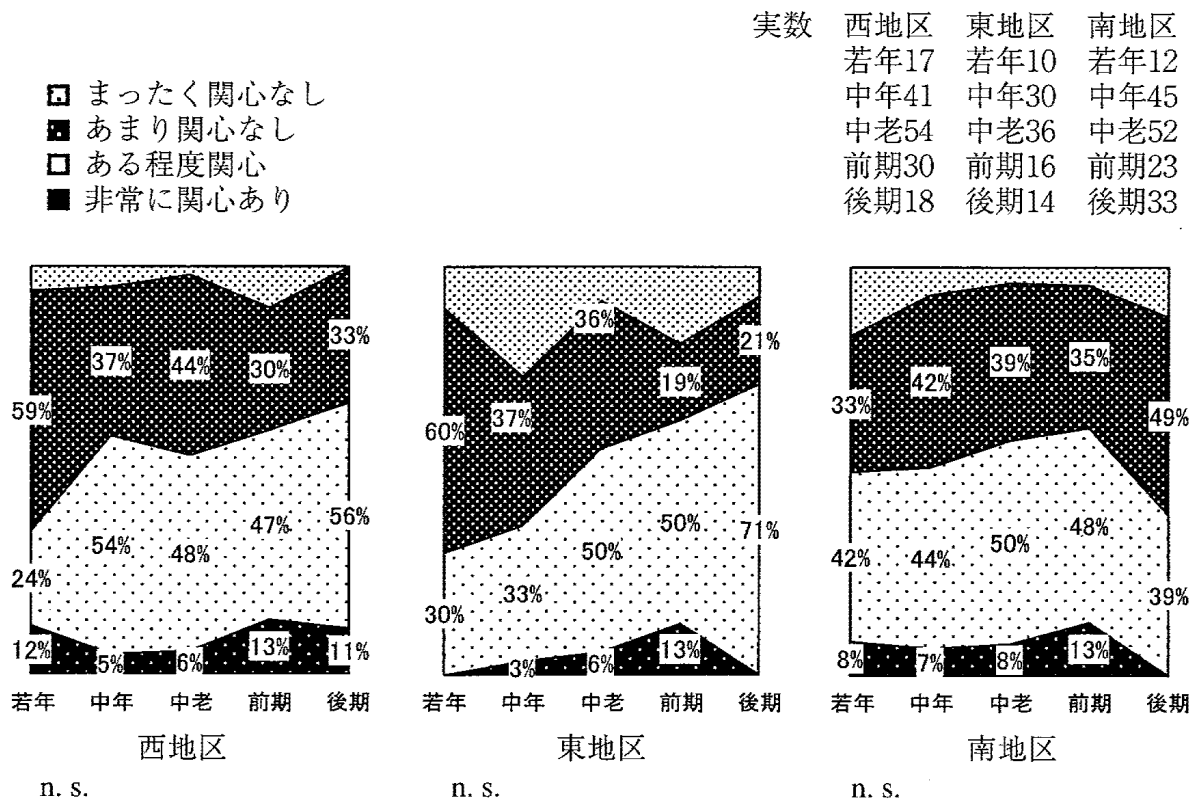
従属変数を決めておこう。現在の事実ではなく、これからやろうとするボランティアに対する準備状態と、それに回帰させる変数の決定である。

ボランティアの準備状態としては、「ボランティアに対して関心がありますか」と聞いた質問を取り上げた。同質問は、高齢者ボランティアに特定せずにデフューズなボランティアについて、現在関心があってやっているものも、将来関心が持てる可能性があるものも、聞いたものである。

独立変数は、政治集会参加、高齢者ボランティアの経験⁽¹⁾である。

仮説としては、政治集会参加と高齢者ボランティアを経験したものは、ボランティア一般に対する関心も高めるし、今一層ボランティアへの意志

図表25 ボランティア関心



(1) ここでは、高齢者ボランティアへ関与したかを日数で問う項目を、関与したか否かの2値に直した。関与日数も使えたのだが、データの中に365日という表現などが散見されより強い結果が出たからである。

を強める。特に、中老以降には顕著に現れる⁽¹²⁾。

今一度従属変数の特性を見ておこう。「図表 25 ボランティア関心」によると、西地区と南地区はこれまで都市型と農村型としてみてきた変数の上下を示す。再説すると、西地区では若年で低く、高齢者で後期も含め高く、南地区では若—中年—中老—前期高齢期でたかく、後期高齢期で低い。問題は東地区であり、「関心」は若年の 30% から後期高齢期の 71% まで右肩上がりに伸びきっている点にある。

図表26 ボランティアに対する関心と政治集会参加，高齢者ボランティアの経験の回帰

	西地区	東地区	南地区
r ²	0.12	0.11	0.19
高齢者ボランティアの経験	*0.2	(-0.1)	**0.3
政治集会	*0.3	*0.3	*0.2

* = $p < 0.05$

** = $p < 0.01$

() = 有意性なし。値は回帰係数，標準化係数。

中老以上のサンプルによる。

結果は、ほぼ仮説通り、中高年における社会参加と政治参加がボランティアに重要な役割を果たすことを示している。ただ容易に予想されたことであるが、東地区の高齢者ボランティアがなんの役割も果たしていないことである。それでも、政治集会の効果は厳然としてあり、これは「おわりに」で議論することにしよう。

おわりに

本論では、三つの地域社会における政治文化の違いと、それが持ちうるそれぞれの高齢社会への将来への対処の見取り図が描けたと思う。本稿での結果をまとめておこう。

第一に、政治的態の違いで、政治集会に対する参加では、50 歳以上

(12) 中老より若い者で政治集会参加経験者が極端に少なくなるため。

で活発な西地区，高齢者で不活発になる東地区，大体全ての年齢層で活発な南地区ということになるであろう。また，「保守－革新」意識では都市部と農村部の違いを見せる。西地区では，保守の強化が進み，対照的に南地区では保守の内訳は中年で完成するとともに「革新」系の後退も顕著である。一貫票では，東地区と南地区の後期高齢者は超高齢期の右肩上がりを示しておりその意味では発展途上である。西地区の後期高齢者は前期高齢者と同じという意味で既に超高齢期がなくなっていることを示した。候補者に対する見方では，「地元か国か」では「地元」組が都市部の西地区に少なく，農村部の南地区に多いというのが観察されたし，「党か人か」では西地区で「党」重視の傾向があり，南地区では「人」重視の傾向を強める一方，東地区の後期高齢者が「どちらでもない」とする超高齢型政治意識を示す。

第二に，地域社会等に対する信頼では，西地区の高齢者の人々は個人主義的でありながら活発にボランティア活動に打ち込み，南地区の人々は集団主義の価値規範を持ちながらも西地区に劣らず活発にボランティアにかかわるが，東地区の人々は，南地区と同じく集団主義ではあるが，ボランティアのような特定の社会活動はまったくやらない。また，生活・政治満足では，東地区で高齢期での不満がかなり高いし，これは政治満足に連続し政治不満派が極めて多いのが目立った。国政信頼では，国政よりも地方の政治への信頼が強いし，農村部になるほどこの傾向は強化される傾向を示す全体的傾向に東地区も足並みを揃える。不満はあれど不信ではないということか。

第三に，現実に実践している高齢者ボランティアに焦点を当てると，都市型高齢者ボランティアの自治的性格の強まり，農村型高齢者ボランティアの全コミュニティ関与的性格の強まり，異常な中老以上殆ど関与がなかった中年のみが細々と関与を継続させている東地区の存在が明らかになった。

最後に，政治集会参加と高齢者ボランティアを経験したものは，ボラン

ティア一般に対する関心も高めるし、今一層ボランティアへの意志を強めるということが観察された。ただ東地区で政治集会のみしか影響を及ぼさなかった点は、ボランティアへの道筋がか細いながらも描けているが、政治参加だけではあまりに弱い。一番大きな原因は、高齢者ボランティアの実数が少なかったことにあるが、高齢者のボランティアへの関心も高く、かつ政治不満も高く、かなり豊かな退職・引退者たちがなぜ現実の高齢者ボランティアを少なくしかやらないのか、地域で考えていくべき課題である。

現状では、都市部も、農村部も、あるいは、その中間に存在するコミュニティも、それぞれの課題を持ちながらも、ボランティアに対する実際の行動をしめし、またその意欲を持ち始めたといえる。三木町に内包する異なる三つの政治文化に対して、中高年における政治集会という共通する文化が追加されたことは、高齢社会に対処する処方箋の発展に対し大きな期待を与えるだろう。